

「しなやかで、躍動感があり、洗練されている」。東京純心女子大教授でパイプオルガン奏者の酒井多賀志さん(54) (東京都八王子市)は、そんな言葉で奄美の島唄の魅力語る。毎年、夏から秋にかけて鹿児島県・奄美諸島に滞在し、地元の唄者と一緒になって繰り広げるコンサートも、今年で十年目を迎えた。

今月八日、酒井さんは同県名瀬市の大浜海浜公園の広場に立った。哀感漂う島唄の旋律が打ち寄せる波の音と重なる。地元の奏者による三線や太鼓に「西洋楽器の女王」の別名を持つパイプオルガンの音色が絡み合い、幻想的な世界が広がった。

「潮の流れのようなオルガンの音に、心が吸い込まれる」「島唄の旋律とオルガンの響きが調和し、何回聴いてもぞくぞくする」。演奏を聴いた地元の人たちの評判だ。

死者を弔う「いきようれ節」、奄美を代表する唄者、坪山豊さん(71)自作の「綾蝶節」後悔「ワイド節」祝いに欠かせない「六調」……。オルガンのパートは、酒井さんが原曲の持ち味を大切にしながら作曲した。共演者として十年來の付き合いである坪山さんは「酒井さんの試みをきっかけに、若者たち

酒井 多賀志さん

東京純心女子大教授

が奄美島唄を様々な楽器で自由にアレンジするようになった。島唄の魅力を再発見し、可能性を広げた功績は計り知れない」とたたえる。

#……b

東京で生まれ、育った。東京芸大オルガン科在学中の一九七〇年、大阪万博にちなんで開催されたオルガンコンクールで最高賞を獲得。以来、国内でのコ

奄美で毎年コンサート



島唄包むオルガンの音色

ンサート・オルガニストの草分け的存在として活躍している。「オルガンを日本の伝統音楽と結びつけることで、外国の楽器というイメージを壊したい」と、尺八や琴とのアンサンブルにも積極的に取り組んでいる。

川村学園女子大教授で、奄美諸島の民俗音楽研究者でもある妻の正子さん(55)に誘われ、初めて奄美を訪れたのは、八四年の夏だった。その後も何度か足を運ぶうち、島唄の存在が次第に大きくなっていく。「ひよっ

としたら、パイプオルガンとのアンサンブルが可能では」とひらめいた。相談を受けた正子さんも「意外と面白いかも知れない」と思った。

秋には東京と埼玉に招き、パイプオルガンとの初の音合わせに臨んだ。「島唄を包むオルガンの響きが、奄美の島の緑深い山々や真っ青な海に感じられ、直感的に『これはいける』と思った」。

共演10年 魅力を再発見

初公演は九二年十月、東京で。九五年九月には「里帰りコンサート」と銘打ち、奄美大島での初演を実現させた。

#……b

五十歳で車の免許を取得すると、軽ワゴン車を購入。夏になると、荷室に特注のイタリア製デジタル式パイプオルガンを積み込み、フェリーを利用して、奄美大島や徳之島、沖永良部島などを巡回している。

与論島など他の島々にも足を延ばし、様々な西洋楽器をアンサンブルに加える構想もある。「奄美の唄文化が受け継がれていく力になりたい」。十月二十日には東京で「奄美島唄とパイプオルガンの出会い十周年記念コンサート」を開く。

高梨 忍

